

「物井」考

— Studies on MONOI —

菊池良輝

by Yoshiteru Kikuchi

序

「物井」考

本学は地理的には千葉県佐倉市山王町に位置する。ところで、本学の教職員・学生のお大半が利用している「JR物井駅」の「物井」の名称は地名に由来している。

本稿は「物井」を歴史的に考察しようとするものである。

尚、物井は、いわゆる印旛・千葉両地方の境界線上に位置しているが、印旛地方により影響を受けていた、と思われることを付記しておきたい。

一、大和王朝の房総半島進出

房総半島が史書に登場するのは『日本書紀』卷二・神代、天孫降臨段の一書(二)の次の記事を初見とする。

一書曰、天神遣^ニ経津主神・武甕槌神^一使^レ平^一定葦原中国^ニ、二神曰、天有^ニ惡神^一、名曰^ニ天津甕星^一、亦名大香香背男、請先誅^ニ此

神^一、然後下撥^ニ葦原中国^一、是時斎主神号^ニ斎之大人^一、此神今在^ニ乎東国磯取之地^一也。

この「磯取」は『和名抄』に言う「香取」であり、現在の千葉県香取郡地方というのが一般的である。

もとより、この記事を以て、即史実と認めることは出来ない。しかし、

『延喜式』^四神名帳に大座として記載されている「香取神宮」が、経津主神を祭神としていと推測されることを思うと、房総半島への大和王朝の最初の足跡とみてもあながち即断とは言えまい。

仮に、『日本書紀』記載の通り、忍穗耳尊の世代とすれば、三世紀前半であろうか。

次に、房総半島に関連する記載は『記』『紀』の崇神朝のいわゆる四道將軍の派遣記事であろう。

『古事紀』^七中卷・崇神天皇段

又此之御世、大毘古命者遣^二高志道^一、其子建沼河別命者遣^二東方十二道^一而、令^二和^一平其麻都漏波奴人等^一、又日子坐王者遣^二且波国^一。

『日本書紀』卷五・崇神紀、十年九月丙戌朔甲午条

以^二大彦命^一遣^二北陸^一、武渟川別遣^二東海^一、吉備津彦遣^二西道^一、丹波主命遣^二丹波^一、因詔之曰、若有^レ不^レ受^レ教者、乃^レ挙^レ兵伐之、既而共授^二印綬^一為^二將軍^一。

『古事記』の「東方十二道」につき、本居宣長は、「尾張・参河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模・武蔵・総〔上総・下総なり、安房は、後上総より分れたり〕常陸・陸奥なるべきか」と述べている。

大毘古命^二大彦命^一が、埼玉県行田市埼玉古墳群出土の金象嵌辛亥銘鉄剣銘文の「意富此坵」に比定されることが定着しつつある今日、同様の伝承を持つ建沼河別^二武渟川別^一も、相当の歴史的事実を伝えていると見て良いと思われる。

古事記の「十二道」を『日本書紀』は「東海」と表記しているが、飯田武郷^二は、特に地域を特定してはいない。

しかし、会津の地名起源説話^三・県主設置の可能性^四・伊佐須美神社の存在^五・前方後円墳型の大塚山古墳等^六を見る時、会津地域が関東地方の中ではとび抜けて大和王権との結びつきが深いことは事実であろう。

そうなれば、建沼河別命^二武渟川別本人^一か、或いは彼に擬人化された人物・団体が房総半島に足跡を印したことは十分想像できる。

ところで、竹田臣は武渟川別命の子孫とされるが、『千葉県歴史・全』は、「安房・朝夷・香取諸郡に健田村あるは、蓋し武渟川別命の子孫た

る竹田臣の居住せし処なるべく、其の子孫の房総の地に蕃衍せるは推察に難からず」と述べている。

この武渟川別命と関連あるとされる健田村は、景行天皇との関係も考えられる、以下考証する。

「健田」は律令制下の朝夷・平群・香取各郡に見えるが、朝夷・平群・香取の順に考えてみる。

(一) 朝夷

『和名抄』^九安房国朝夷郡条に「健田」がある、訓は版本の違いにより「太津多（「タツタ」であろう）」と「多介太（「タケタ」であろう）」の二種が示されている。

『房陽郡郷考』^{一〇}は朝夷郡条に御原・新田・大瀨・満祿と共に「健田」の郷名を挙げているが、「廃ス」と注記している（同書の成立は嘉永三年（一八五〇））。

『千葉県地名変遷総覧』^{一一}は安房国旧朝夷郡条「新田」項にて、大略「健田村が昭和一九年四月一日に千倉町に編入されたこと。『和名抄』朝夷郡新田郷が現在の健田村か、とした後、新田郷は瀬戸・宇田一帯か」としている。

今日の「安房郡千倉町瀬戸・宇田」地方である。千葉県歴史研究会編纂子の言う「安房の健田村」の地と思われる。

(二) 平群

一方、同郡「健田（多介太）」^{一二}の項では、大略「健田は上滝田であるうが、朝夷郡に属するの、平群郡に属するのかわかりたくない」としている。確かに、邨岡良弼著『日本地理志料による・千葉県郷名分布図』^{一四}

によれば、上滝田は朝夷郡に属しているが、当地方は大きく平群郡方面に組み込んでおり、地形上からも判断に迷うところである。

尚、ここで注目されることは、健田が景行天皇と磐鹿六鴈命の伝承に登場してくる「河曲・浮島」の一方の比定地に近いということである。

この場合、河曲は安房郡河曲（加波和）^{二二}現・館山市西川名^{二二}であり、浮島は平群郡石井（伊波為）^{二二}現・安房郡鋸南町勝山^{二二}沖の浮島^{二六}である。

ここに言う安房郡健田が、景行天皇・磐鹿六鴈命の伝承を伝える河曲・浮島に近いことは看過できないのではあるまいか。

仮に景行天皇一行が房総半島への足跡を印そうとした場合、大和王権の強固な拠点があれば、当然その近辺に上陸しようと思えるからである。

「物井」考

この「健田」は今日の安房郡三芳村水波戸・犬掛^{二七}一带である。千葉県歴史研究会編纂子の言う「朝夷の健田村」の地と思われる。

（三）香取

『和名抄』^{二八}香取郡条に「健田」がある。

吉田東吾^{二九}は大略「米沢村・神崎村・高岡村に当たり、米沢の武田は健田の本郷である」と述べている。

今日の「香取郡神崎町武田」^{三〇}地方である。

ところで『常陸国風土記』^{三一}行方郡条に「郡南二十里 香澄里 古伝

曰 大足日子天皇 登^{三二}坐下総国印波鳥見丘^{三三} 留連遙望^{三三}とあるが、秋本吉郎氏は頭注で、この「印波鳥見丘」を「印旛郡本埜村の丘陵地、印旛沼と利根川との間にある台地」と解説されている。

地名的にも『和名抄』^{三三}下総国印旛郡条に「言^{三三}（登）美^{三三}（刀弥か）」^{三三}が

あり、吉田東吾^{三三}が印旛郡内に挙げている小林に鳥見神社がある。

今日の「印旛郡印西町平岡・小林」^{三六}地方である。

問題は神崎町と印西町の両比定地が比較的近いことである。両比定地を隔てる地形上の障害はないし、さらに利根川を利用すれば、まさに「指呼の間」である。

さらに、注意したいのは、武田の利根川の対岸に常陸国浮島^{三七}の名がみえることである。このことは後に論ずる。

いずれにせよ、香取の健田も景行天皇行幸伝承との関連がみえることは注目される。

以上、房総半島の「健田」が景行天皇との関連を論ぜられるという、ある種の特定がみえることは、景行天皇の房総半島行幸伝承に一つの裏付けを与えることにもなる。

景行天皇と房総半島とのかわり合いについては、良く知られた磐鹿六鴈命^{三八}（以下「六鴈命」とする）との故事がある。

景行天皇と六鴈命との故事については『日本書紀』^{三九}卷七・景行紀五十年冬十月の条、『高橋氏文』^{四〇}などに掲載されている。今、『高橋氏文』を掲げ、問題点を一・二論ずる。

還時顧^{四一}、舳魚多追来、即磐鹿六獺命、以^{四二}角弭之弓^{四二}、当^{四三}游魚之中^{四三}、即着^{四四}弭而出忽獲^{四四}、数隻^{四五}、仍名曰頑魚^{四五}、此今諺曰^{四六}「堅魚」、船遇^{四七}潮涸^{四七}、渚上^{四八}居奴^{四八}掘出^{四九}、為^{五〇}得^{五〇}八尺白蛤一貝^{五〇}、磐鹿六獺命、捧^{五一}伴二種之物^{五一}、献^{五二}於太后^{五二}、即太后嘗給^{五三}悦給^{五三}、詔^{五四}久^{五四}、甚味清造欲^{五五}供^{五五}御食^{五五}、爾時磐鹿六獺命申^{五六}久^{五六}、六獺令析理^{五六}、将供奉^{五七}、白^{五七}天、遣^{五八}喚^{五八}無邪志国造上祖大多毛比、知々夫国造上祖天上腹天下腹

人等、為^レ膾炙燒雜造盛^天、見^{河曲山樞葉}天 高次八杖^{刺作}
 利、見^{真木葉}天 枚次八枚^{刺作}天、取^{日影}天 為^{縵以}蒲
 葉^{美頭良}卷、採^{麻佐氣葛}多須岐^{加氣}、為^{帶足纏}結
 天、供^{御雜物}平 結^筋天、乘輿從^御還御入坐時^為供奉、
 此時刺^久、誰造所進物間給、爾時太后奏、此者磐鹿六獺命所^獻之物
 也、即勸給^比、嘗賜^天勅^久、此者磐鹿六獺命獨^我心^波非矣、斯天坐神
 乃^{行賜}倍物也、大倭国者、以^{行事}負^名国^奈磐鹿六獺命^波、朕^我
 王子等^爾、阿礼子孫^乃八十連属^爾、遠^久天皇^我天津御食^平齋忌取
 持^天仕奉^止負賜^天、則若湯坐連等始祖、物部意富売布連^乃佩大刀^平
 令^{脱置}天 副賜^支。

この文章には、伴信友の他多くの研究^四があり贅言を要しない。

ここで、「河曲・浮島」について考えてみたい。

信友は、浮島が現・千葉県安房郡鋸南町勝山沖の浮島であり、河曲が
 現・館山市西川名付近の大山と考えたようである（次頁図一参照）。

一方、瀧川氏^四は船橋・行徳^{きょうとく}・幕張^{まくわ}（馬加）の地を比定された。氏の見
 解は極めて示唆に富み、且つ説得力に富むものである。

筆者は、景行天皇の上陸地点が利根川沿岸であった可能性もあること
 を指摘しておきたいと思う。理由は、『常陸国風土記』『同逸文』の記
 事、「鳥見神社」の存在等による、以下述べる。

『旧事紀』^{四四}国造本紀によれば、房総半島の十一の国造の内、阿波（後、
 長狭が分離）・伊基・須恵・馬来田・上海上・菊麻・武社の八つの国造
 は、師長・相武・无邪志・筑波・新治等、他の関東地方の国造と共に、
 第十三代成務朝に定賜されている。一方、印波・下海上の両国造は第十

五代応神朝に定賜されている。

これは、印旛地方に相当強力な勢力が存在し、当地方を大和王朝傘下
 に組み入れるのに時間がかかった為ではあるまいか。考古学的に見ても
 竜角寺古墳群^{四四}の集まりが、当地に相当な土豪が存在したことを示してい
 る。図（次頁図二参照）を見ても分かる通り、印旛地方は大きな包囲網
 の中にいたようにも思える。そこに何かしらの戦略的意図を汲みとるこ
 とも可能である。

景行天皇は成務天皇の一代前の天皇である。景行天皇の房総半島行幸
 伝承は、房総半島で最後まで帰順に服しない印旛地方に対する大和王権
 の政治的軍事的行動の反映ではあるまいか。

『常陸国風土記』^{四六}は、景行天皇が「登^坐下総国印波鳥見丘^一」と記
 しているが、これなど大和王権軍の印旛地方への行動を象徴的に記した
 ものであろう。

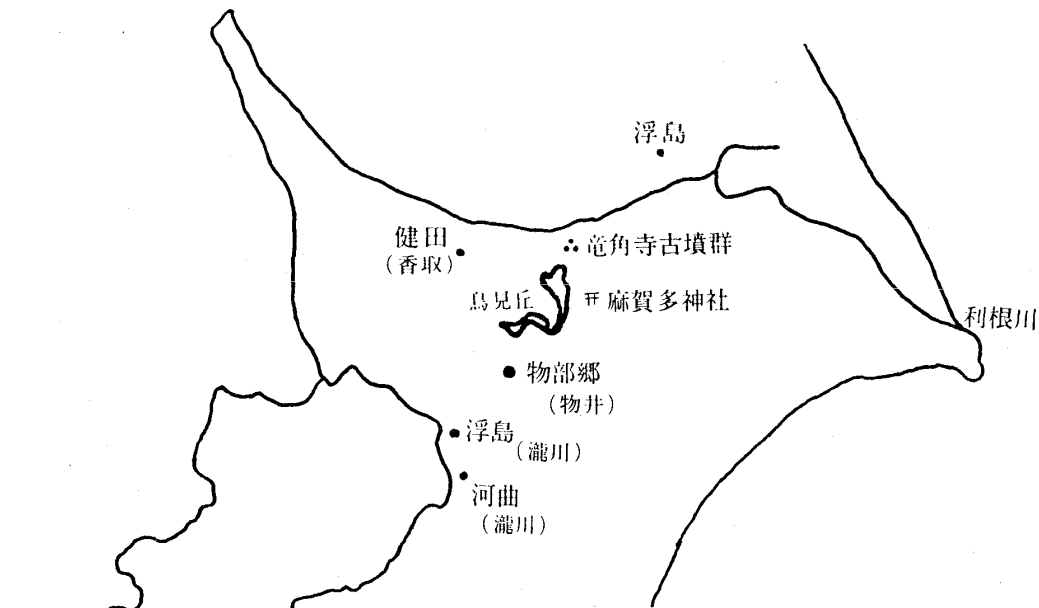
六鴈命の故事も大和王権軍の房総地方上陸時の一つの風景的なものと
 思われる。

ところで『常陸国風土記逸文』^{四七}賀久賀鳥条に次のようにある。

風土記^ラ案^{ズルニ}、常陸^ノ国^カ河内^ノ郡。浮嶋^ノ村ニ鳥アリ。賀久賀^ガ
 鳥^ト云フ。ソノ吟嘴^{ギンセウ}ノ音聲^{オンセイ}アイシツベシ。大足日子天皇、此ノ村ノ
 カリミヤ^ニトミマリ王フコト卅日、其ノ間^{あいだ}、天皇、此ノ鳥ノ声^ヲ
 キコシメシテ、伊賀理^{イカリ}命^{ミコ}ツカハシテ、網^{あみ}ハリテトラシメ玉フ。
 悦感^{エツカン}シ玉テ、鳥取^{トリ}ト云フ姓^ナヲ給セケリ。其ノ
 子孫^{しそん}イマニ此ノ所^ニスムト云ヘリ。

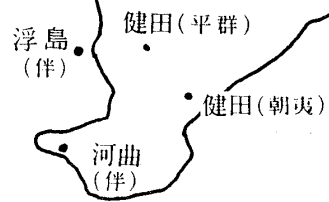
秋本氏は、河内郡を「茨城県稲敷郡桜川村に属す。霞ガ浦西南部の島

「物 井」考



〔図一〕 浮島・河曲・竜角寺古墳群

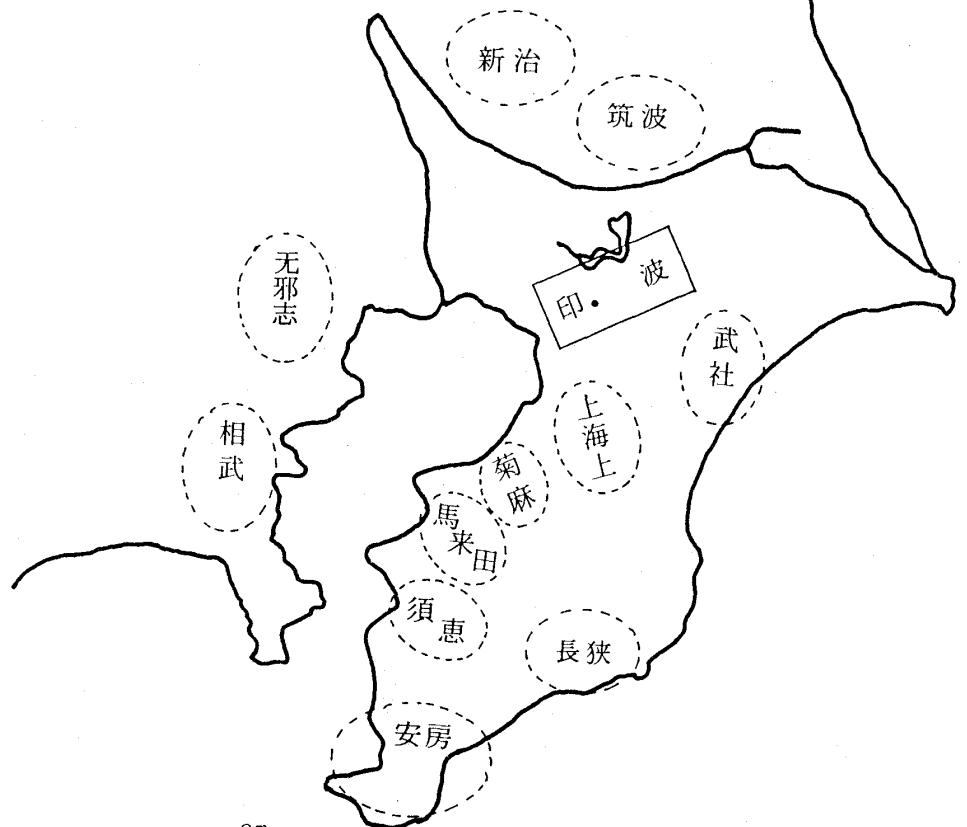
(注) 伴 : 伴信友「高橋氏文考注」
 瀧 川 : 瀧川政次郎「上代の隅田川両岸地帯
 ー高橋氏文を中心としてー」
 鳥見丘 : 秋本吉郎「常陸風土記」



〔図二〕

「印 波」を 包 囲 す る 各 国 造

・印：物井



(旧浮島村)で、現伝本風土記信太郡乗浜里の条に浮島里とある地。景行紀・高橋氏文では安房国の浮島としている」と、伊賀理ノ命を「景行紀・氏文に膳部臣・高橋文子の祖磐鹿六獺命とあるのと同入か。または鳥取氏のもった別伝か」と、それぞれ解説されている。

当然、景行天皇の房総方面行幸における、いくつかの事柄が混在していることは考えられる。であるから『高橋氏文』『風土記逸文』の記事が、同一の事実を記したもので、別個の事実を記したもので、それはそれで景行天皇の行幸伝承が、ゆらぐものではないと考えられる。

筆者が取り上げたいのは、浮島の地に比定されている茨城県稲敷郡桜川村と、利根川を隔てた千葉県印旛郡の地に、鳥見神社が多数設置されていることである(図三参照)。

この「鳥見」は『常陸国風土記』行方郡条に記す景行天皇が登頂したという「鳥見丘」にちなむものであろう。その鳥見神社が、印旛郡境域に、十二社も集中的に見られるということは、神社の勧請だけでは説明がつかないものを感じる。

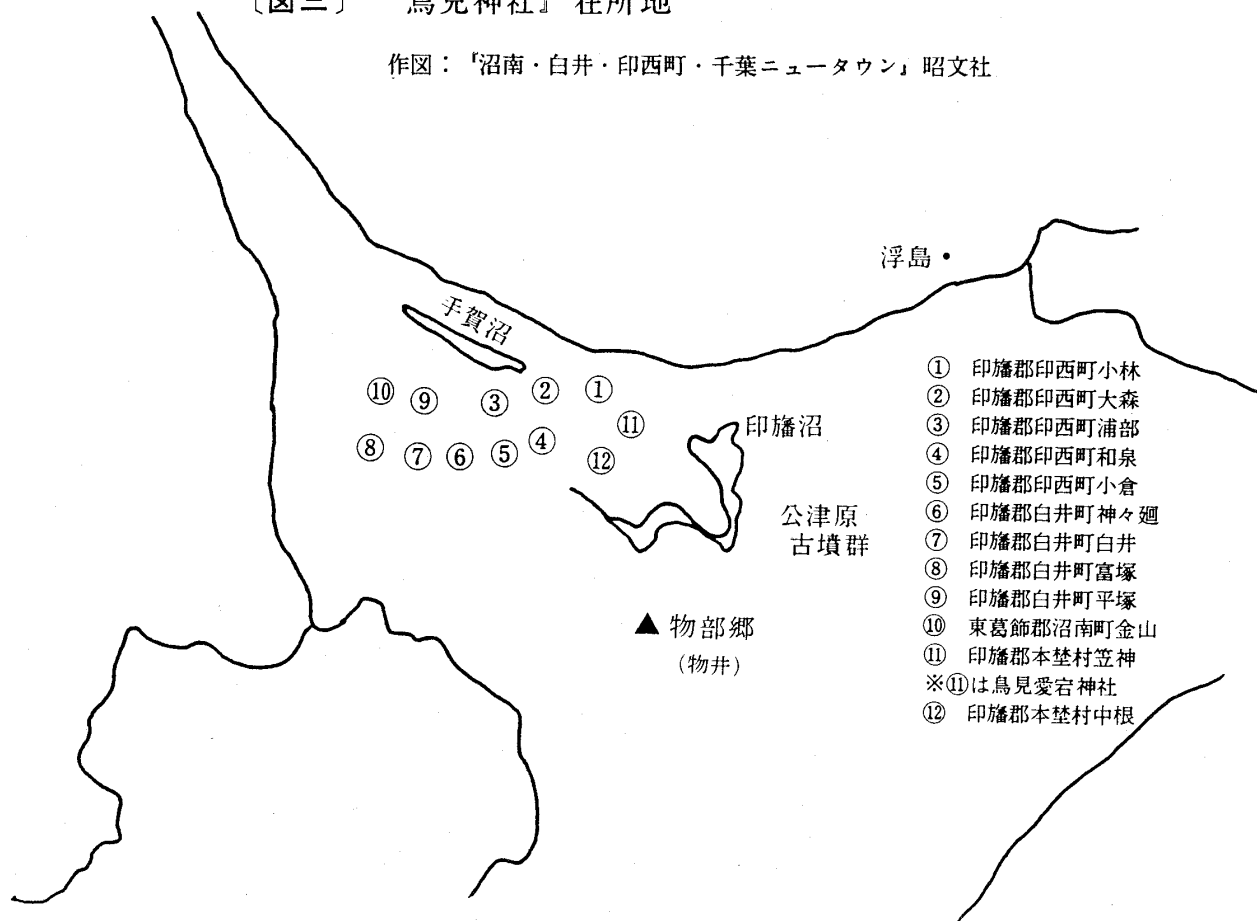
この鳥見神社の集中建立の広がり、香取郡の健田の所在と相俟って利根川を隔て、稲敷郡桜川村と結びつけられるのではあるまいか。

又、『常陸国風土記』信太郡条に「郡北十里 碓井 古老曰 大足日子天皇 幸 浮島之帳宮 無 水供御」とあるが、この浮島も桜川村の同所の所在のものであり、同じ時期の伝承を伝えるものであろう。

ところで『日本書紀』神武紀・即位前紀、戊午年九月甲子朔戊辰条に「而陟 于丹生川上」、用祭 天神地祇、(略) 吾今当以 嚴盆 沉 于丹生之川、如魚無 大小 悉醉而流、譬猶 椹葉之浮流 者、吾必

〔図三〕 『鳥見神社』在所在地

作図：「沼南・白井・印西町・千葉ニュータウン」昭文社



能定^ニ此国^ニ、如其不^レ爾、終無所^レ成、乃沉^ニ瓮^ニ於川^ニ、其口向^レ下、頃之魚皆浮出、隋^レ水嶮^ニ、時椎根津彦見而奏之、天皇大喜、乃拔^ニ取丹生川上之五百箇真坂樹^ニ以祭^ニ諸神^ニ、自^ニ此始有^ニ嚴瓮之置^ニ也」^{五五}とあり、同四年春二月壬戌朔甲申条に「我皇祖之靈也自^ニ天降靈光^ニ助朕躬^ニ、今諸虜已平、海内無^レ事、可^レ以郊^ニ祀天神^ニ用申^ニ大考^ニ者也、乃立^ニ靈時於鳥見山中^ニ、其地号曰^ニ上小野榛原、下小野榛原^ニ、用祭^ニ皇祖天神^ニ焉^ニとある。

前段は『高橋氏文』の、六獺命が白蛤を料理する場面と文の構成が似ているが、それはそれとして、景行天皇は利根川を丹生川に擬し、鳥見神社の所在地の一つで、戦勝でも祈ったのではあるまいか。

後段は、いわゆる「鳥見山^{とみのやま}靈時^{まづりのとき}」である。印波の鳥見神社も、単に地名の登美^{トミ}からだけではなく、景行天皇一行が前段同様、かつての神武天皇の故事に倣って神祇を行った古跡ではあるまいか。それが、地名の登美ではなく、「鳥見」の名を今日に残した理由かもしれない。

そうなれば、景行天皇一行は利根川を遡行し、稲敷郡桜川村を拠点に印旛郡本埜村の丘陵地に入ったのであろう、河曲は、「河のほとり^{五五}」の意であり、それこそ利根川には河曲はいくらでもある。「河曲」はそれらの内の複数か一つを指している可能性もある。

以上、景行天皇と房総半島の記事につき述べた、安本氏によれば景行朝は三九〇年代である。

先記した「国造の任命」中、印旛地方の国造につき考えてみる。

『旧事紀^{五五}』卷十・国造本紀に「印波国造、輕嶋豊明朝御代神八井耳命

八世孫伊都許利命定^ニ賜国造^ニとある。

神八井耳命は神武天皇と正妃・媛蹈鞬五十鈴媛命との長子である^{五六}。輕嶋豊明朝は応神朝^{五七}。応神朝は第十五世、神八井耳命は神武天皇より第九代で世代的に異和感を生ずるが、当時、天皇（大王）が国家統一事業の直接指揮をとっていたことを考えると、その身辺の危険は臣下に比べてはるかに高い^{五八}。少なくとも絶対者と臣下との経過時間の比較上からは肯首できるものがある。応神朝は四二〇年頃と推定される^{五九}。

ところで、伊都許利命の実在性であるが、成田市船形八三四に鎮座する麻賀多神社に付随する古墳が、命の墓^{六〇}と言う。麻賀多神社の名は、『延喜式^{六一}』神名帳・下総国条に「印旛郡一座小麻賀多神社」とある。

麻賀多神社は他に同市台方にも、もう一社があることから、中古以来混乱がみられるようである。同神社については、小倉博氏^{六二}が解説されているが、伝伊都許利古墳については、成田市教育委員会の測量調査^{六三}を用い、次のように述べておられる。

古墳の形態や石室・石棺などから考えて七世紀後半から八世紀初頭のものであろう。

古墳の築造が七世紀後半から八世紀初頭のものとするれば、五世紀初頭と推定される応神朝とは合わないことになる。

一方、同社に伝わる縁起^{六四}によれば、日本武尊が東往途上、大杉に鏡を掛け、伊勢の大御神を拜んで戦勝を祈念したとある。同神社には「公津の大杉」と呼ばれる周囲約六米・高さ四十米の御神木が聳立している。又、神社周辺の鬱蒼たる森林は「麻賀多神社の森」として千葉県指定天

然記念物^{六五}となっている。

さらに、同神社には命にまつわる天水の恵み伝承がある。おそらく良質且つ豊富な水が、この地と深くかかわり合っていると思われる。

現在、同神社の東隣りには千葉県水道局成田給水場の施設があり、巨大な給水塔^{六六}が設立されている。

県指定天然記念物に指定されるに耐え得るだけの、鬱蒼たる森林の存在を想像させる日本武尊の伝承と言い、県水道局の巨大施設建設に耐え得るだけの良質且つ豊富な水の存在を、彷彿とさせる伝承といふ、伊都許利命の墓という伝承を真剣に検討する必要がある。

伝伊都許利命墓の築造調査年代と、命の国造定賜年代が合わないという事実はあるが、現在の墓の築造以前に、命の何かしらの根跡が、同地に存在したことは十分考えられるから、決して結論を急ぐ必要はあるまい。

伝伊都許利命古墳を含む成田市江井須から八代にかけての印旛沼東岸台上に存在する八代台、天王塚・船塚、瓢塚の三古墳群、一二〇基前後の大小古墳群は、公津原古墳群と称する。この古墳群は、古代の印旛沼周辺の有力古墳群として、考古学上、重要な位置を占めており、これら古墳群の被葬者或いは築造者が、どう大和王権とかかわり合ったか、上代史解明上の論点ともなり得よう。

以上、主に印旛地方を中心として、当地方に大和王権が、いつ頃どのような進出して来たか、その一端を述べた。略述すると以下のようになろう。

一、景行天皇或いは同天皇に比せられる政治勢力が、南房総か千葉市

沖近辺か利根川遡行か、いずれかを拠点或いは方法を取り、印旛沼東北方面に進出、一つの拠点を築いた可能性がある。

二、拠点確保に際し、神武天皇が、現・奈良県桜井市或いは宇陀郡榛原町附近にかけての地で行ったとみられる、いわゆる「鳥見山霊時」の儀式を、印旛郡印西町小林・同白井町・同本埜村にかけての地で行った可能性がある。

三、大和王権の関東地方進出に際し、印旛地方は関東地域では、最後にその支配下に組み込まれたものと推定される。

その年代は、五世紀初頭か。

四、初代印波国造・伊都許利命の存在の可能性につき深く論ずる必要がある。

(注) 一、編輯者・黒板勝美他、新訂増補・国史大系『日本書紀』前篇。吉川弘文館。昭和五十六年。七二頁。

二、池邊彌著『和名類聚抄郡里驛名考證』吉川弘文館刊行。昭和五十六年。三八五頁。

三、飯田武郷著『日本書紀通釋』第二。教育出版センター、昭和五十八年。八六八頁。

香取の地名起源については「吉田東吾著『大日本地名辞書』五・坂東。東京富山房。昭和十四年」「清宮秀堅・頼栗著『下総国舊事考』」等に詳説している。

しかし、「楫」(「楫」の異体字)藤堂明保編『字研漢和字典』学習研究社。昭和五十六年、六七五頁)。中国上古音「tsjəp」と「香」。中国上古音「hian」)は共に音義不通であり、さりとて所謂「転注」^{六七}とも思えない。

又、『説文』では「楫」は「所目擢舟也、從木、聃声」とあり、「香」は「芳也、从黍、从甘、春秋伝曰、黍稷声香、凡馨之属皆从馨」とある(漢・許慎撰、清・段玉裁注『説文解字注』上海古籍出版社参照)。段注に「楫」の発音は「子葉切」とあり、「香」の発音は「許

良切」とあり、不通である。義も又、不通である。

四、編輯者・黒板勝美他、新訂増補・国史大系「交替式・弘仁式・延喜式」延喜式卷九・神祇、吉川弘文館。昭和五十六年。二二九頁。

五、経津主神と香取神社と関連等については、例えば千葉県歴史研究会編纂『千葉県歴史・全』昭和四年、一〇二頁参照。

六、八安本美典著『神武東遷』中央公論社刊。昭和五十六年。一三三頁以下及び八平山朝治著「女王卑弥呼の年代」『邪馬台国』梓書院。昭和五十八年。一九〇頁参照。

七、荻原浅男他校注・訳、日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』小学館・刊。昭和五十七年。一九〇頁。

八、前掲一注・一六三頁。

九、編集校訂・大野晋他「本居宣長全集第十一巻」『古事記伝』筑摩書房版。昭和五十一年。四一頁。

一〇、埼玉県教育委員会『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』埼玉県自治振興センター内県政情報資料室。昭和五十七年。

二、武渟川別は、他に『日本書紀』崇神紀・六十年秋七月丙申朔己酉条（前掲一注・一七〇頁）、同書垂仁紀・二十五年春二月丁巳朔甲子条（同・一八四頁）、『新撰姓氏録』第二巻・左京皇別条（著者・佐伯有清。吉川弘文館。三四四頁）等に記載されている。

三、前掲三注・一三七―一四頁。

三、前掲七注・一九一頁及び一九〇頁の頭注。

四、但馬權椽・出雲連廣貞等、田中叢書『大同類聚方』巻二九・奈川企項に「陸奥国会津県主乃其元波大已貴命乃樹方也」とある。

一五、前掲四注・二五九頁に「陸奥国、会津郡二座、伊佐須美神社」とある。この伊佐須美神社が、伊勢神社・熱田神社と共に「日本三古社」とされているのは周知の事実である。

一六、小林三郎氏「会津大塚山古墳」『日本古墳辞典』東京堂出版。平成元年。一一四頁。

小林氏は同古墳を「前方部を北面する前方後円墳である。（略）四世紀終末ごろの築造と推定される。東北南部における代表的な古墳である」と解説されている。四世紀終末と言え、大毘古命Ⅱ大彦命・建沼河別命Ⅱ武渟川別を派遣した崇神朝に相当する（注六参照）。

一七、前掲一一注・『新撰姓氏録』。

一八、千葉県歴史研究会編纂『千葉縣歴史』全、昭和四年。二頁。

一九、前掲二注・三六七頁。

二〇、鳥海醉車編『房陽郡郷考』崙書房。影印版昭和五十一年。二頁。

三、『千葉県地名変遷総覧』千葉県郷土資料刊行会。昭和四十七年。九頁。

三、エリアマップ『千葉県』昭文社。昭和57年。

三、前掲二注・一一頁。

四、柳岡良弼著『日本地理志料による・千葉県郷名分布図』千葉県立中央図書館蔵。明治二十年作成。

五、編纂者・塙保己一「群書類従・第六輯、公事部『本朝月令』」続群書類従完成会。二百七十六―八頁。

六、編集兼発行者・市島謙吉「伴信友全集第三『高橋氏文考注』」国書刊行会。明治四十年。四十八頁以下。

七、前掲二注。

八、前掲二注・三八五頁。

九、前掲三注・『大日本地名辞書』三二二七頁。

一〇、前掲二注。

三、秋本吉郎校注「日本古典文学大系『風土記』岩波書店刊行。昭和33年。五八頁。

三、前掲二注・三七八頁。

三、前掲二注・一二五頁。

四、前掲三注・『大日本地名辞書』「平岡」の項。三三四四頁。

五、前掲二注。

吉田東吾が挙げた「鳥見神社」は、現・印旛郡印西町小林の鳥見神社と思われる。鳥見神社は他に、同郡本埜村中根、同印西町大森・和泉・浦部・小倉、同白井町白井・平塚・神々廻・富塚、東葛飾郡金山に在り、鳥見愛宕神社が印旛郡本埜村笠神にある（前掲二注・『沼南・白井・印西町、千葉ニュータウン』）。

上掲の所在地の内、東葛飾郡金山の鳥見神社は印旛郡白井町富塚から二〇〇メートルほどしか離れておらず、印旛郡内に集中的に見える鳥見神社の一翼を構成するものである。

景行天皇行幸伝承にかかわる何等かの痕跡であろう。

六、前掲二注。

七、前掲二注。

八、磐鹿六雁命（『日本書紀』前掲一注・二三三頁）は他に磐鹿六雁命（『本朝月令』前掲二五注。『新撰姓氏録』前掲一一注・一六〇頁）

・「磐鹿六猶命（『高橋氏文』前掲二六注・五十二頁。『新撰姓氏錄逸文』前掲・三五四頁）」「伊波我牟都加利命（『新撰姓氏錄逸文』前掲一注・一六六頁）」などと書かれている。

亮、前掲一注・二三三頁。

四、前掲二五・二六注。『伴信友全集・高橋氏文考注』を使用する。

尚、文中の異体字は正字に直してある。

四、例えば、佐伯有清氏『新撰姓氏録の研究』吉川弘文館刊行、昭和五十六年・瀧川政次郎氏「上代の隅田川両岸地帯―高橋氏文を中心として―」『國學院雜誌』第五十六卷第五號、國學院大學出版部、昭和三十一年・後藤四郎氏「内膳奉膳について―高橋安曇二氏の關係を中心として―」『書陵部紀要』11 宮内庁書陵部、昭和34年などが挙げられる。

四、前掲二六注。尚、『和名抄』安房国安房郡に「河曲（加波和）」がある（前掲二注・三六六頁）。

四、前掲四一注。瀧川政次郎氏・九六頁。

四、大野七三編著『先代旧事本紀』訓註。新人物往来社。平成元年。二六三―五頁。

四、前掲一六注・大塚初重氏「龍角寺古墳群」。六〇九―一〇頁。

氏は当古墳を「東国における重要な古墳群である」と説明されている。

四、前掲三一注。

四、前掲三一注・四五四頁。

四、前掲三五注参照。

四、前掲二注。

四、前掲三一注・四二頁。

四、前掲一注・一一一―一二・一三三頁。

四、前掲三二注参照。

尚、奈良県桜井市及び宇陀郡榛原町にそれぞれ鳥見山があるが（前掲二二注『奈良県』）、「鳥見山靈時」伝承は、榛原町と言われる（前掲九注・『古事記伝』）。

一方、『日本書紀』卷三・神武紀、即位前紀、戊午年十有二月癸巳朔丙申条記載のいわゆる「金色靈鷲」伝承にまつわる鷲邑^{とみやま}鳥見は桜井市と言われ（同）、いずれも神武天皇伝承とのつながりが深い。

又、桜井市の鳥見山北麓に鎮座する宗像神社（『延喜式』神名帳・大和国城上郡、前掲四注・一九二頁）に伝わる社伝によると「登美城」

（桜井市外山^{とみやま}か）があるという（日本歴史地名大系第三〇巻『奈良県の地名』平凡社。一九八一年）。

神武天皇伝承にまつわる地名が、そのまま景行天皇行幸伝承が残る印旛丘陵地に集中的に見られることは注目される。

四、「河曲」については例えば『春秋公羊伝』文公十有二年冬十有二月戊午条に「晋人秦人戰于河曲、此偏戰也、（略）河曲疏矣、河千里而一曲也」とあり、郭璞注に「河曲流以据地明、故可以曲地因以起、二国之君數與兵相伐戰無已時、故不言及不別曲直、而地以河曲明兩曲也」とある（十三經注疏『春秋公羊伝注疏』中華書局出版。一九八三年。二二七―二頁）。

五、前掲四四注・二六四頁。

五、前掲一注・一三一頁。

五、前掲七注・二四六頁。

五、上代の天皇（大王）と臣下の世代間の時間の経過の比較については、いわゆる「稻荷山鉄刀銘文」が参考になるかと思われる。「銘文」の場合、天皇は第八代孝元天皇から数えて第十三世代目の第二十一代雄略天皇、臣下は同じく第八代目の平獲居臣である。

本論の場合は、天皇の世代間の年数がさらに短かい、しかし、本論では初代神武天皇からの世数であることに注意する必要がある。国家統一事業上、最も苛烈な時代であった。

稻荷山鉄刀銘文の世代間比較については、△安本美典著『倭の五王の謎』講談社現代新書。昭和五十六年△参照。

五、前掲六注・『神武東遷』。

五、前掲三注・『大日本地名辞書』三三三―三六頁。

尚、古墳に、元文二年（一七三七）冬十一月に山州淀府行軍使・磯邊昌言なる人物が建立した「伊都許利命碑誌」碑が立っている。全文二五六文字からなる漢文体であるが、それによると、乾元中（一三〇二―一三〇三）には、古墳を命の墓に比定していたようである。又、伊都許利命を自然生成の擬人化されたものとみている。

六、前掲四注・二三九頁。

六、小倉博氏「麻賀多神社 成田市台方字櫻山および船形字手黒」『日本の神々―神社と聖地』第十一巻 関東。白水社。一九八四年。三二―六頁。

六、成田市教育委員会「古墳測量調査報告」『成田市の文化財』第9号。

昭和五十二年度。二十一―六頁。

同神社・案内、昭和五十八年。

空、編集発行人・宇野英雄『千葉年鑑』昭和61年版。千葉新聞社。昭和六十年。一六一頁。「県指定記念物」項に「麻賀多神社の森、六、三八六㎡」とある。

空、行政上の表示は「成田市吾妻一一一」となる（前掲二三注・『成田市』）。

尚、亨保七（一七二二）年に刊行された磯邊昌言の『佐倉風土記』神社・麻賀多明神社条に「社司太田氏ノ家ニ蔵ム貞治永正官幣ノ祝文ヲ、其祖家清ノ記詳ニス焉、有七井七台、併ニ在社外四方三百歩ニ、所謂初井・花井・北井・南井・御手洗井・大井・椿井、（以下略）」（『房総文庫』1、房総文庫刊行会。昭和五年。所収。四〇―一頁）とあり、豊富な水に恵まれていたことが想像される。貞治は北朝年号・一三六二―一三六七年。永正は一五〇四―一五二〇年。

空、前掲一六注。「公津原古墳群」。二二四頁。

二、物 井

『和名抄』下総国千葉郡条に「物部」郷なる名が見える。

『和名抄』は承平年間（九三一―一三八）に著わされたものでから、少なくとも、十世紀中頃迄には物部郷の存在が確認できる。

ところで、千葉郡の名称は、『日本後紀』卷十三・桓武紀、延暦廿四年冬十月丁酉朔癸卯の条に「正六位上笠臣田作、千葉国造大私部直善人授外従五位下」とあるのが初見である。

延暦二十四年は西暦八〇五年に当たる。

千葉郡の成立と物部郷の設置が相前後しているとすれば、物部郷は少なくとも九世紀には存在していたことになる。しかし、他の文献等によ

り、その成立時期をもう少し狭めることができる。

『万葉集』卷二十の、（天平勝宝七歳）二月十六日、下総の国の防人部領使少目從七位の下泉犬養宿禰淨人が進れる歌の一首に「千葉の野の児の手柏の含まれどあやにかなしみ置きてたが来ぬ」があり、「右の一首は、千葉の郡の大田部足人」とある。

天平勝宝七年は七五五年に当たる。

又、同じ年の二月九日、上総の国の防人部領使少目從七位の下茨田連沙彌麻呂が進れる歌の数十九首の中に次の二首がある。

わが母の袖持ち撫でてわがからに泣きし心を忘れえぬかも

右の一首は、山辺の郡の上丁物部乎刀良。

大君の命かしこみ出で来れば我が取り著きて言ひし子なほも

右の一首は種汎郡の上丁物部龍

山辺郡は『和名抄』上総国の山辺郡であり、郡治は東金市にあったと思われ、種汎郡は『和名抄』上総国の周准郡であり、郡治は木更津市にあったと思われるもの。

『万葉集』に千葉郡が掲載された頃、すでに物部の姓を冠する人物が、『万葉集』の、しかも同年の項に載っていることは注目される。八世紀中頃にかんりの物部の姓を冠する人々が、房総半島に居住していたことが類推されるからである。

一方、『日本書紀』、『続日本紀』共、物部家と房総半島との関連を結びつけるような人物の記載はない。しかし、『旧事紀』天孫本紀に、櫛玉饒速日尊の次子の宇摩志麻治命の系列に「十世ノ孫物部印葉ノ連公多遲麻ノ大連ノ之子 此ノ連公輕嶋ノ豊明ノ宮 御宇天皇御世 拜為

大連^二奉^レ齊^一神宮^一 姉物部山無媛連公 此^ノ連公、輕嶋豐明宮、御宇天皇立為^二皇妃^一 誕生太子菟道稚郎皇子^一 次^ニ矢田皇女次^ニ雌鳥^一、皇女其矢田皇女者難波高津宮御宇天皇立^二為皇后^一 なる記事がある。

『記』『紀』には物部印葉連公・物部山無媛連公に該当する人物は登場しない。又、『日本書紀』^三では、菟道稚郎皇子（『記』^三宇遲能利紀郎子）・矢田皇女（同・八田若郎女）・雌鳥皇女（同・女鳥王）を生んだのは、和珥臣祖日觸使主（同・丸邇之比布礼能意富美）の女・宮主宅媛（同・宮主矢河枝比売）となっていて、物部家とは何んら係累がない。

応神朝に存命したと思われる物部家の人物としては、物部膳（膳）^四昨^四連・物部大前宿禰^五・物部伊苾弗大連^六らの名前が浮かぶ。いずれも大和主権での要職を占めており、天皇へ妃を入れるだけの立場にはある。

菟道稚郎子皇子達の生母が、いずれであったか。『記・紀』『旧事紀』ともに決定打を欠いており、これ以上の論証は難しい。

しかし印葉連公の「印葉」は『和名抄』^七下総国条の「印旛郡・印幡郷」を、山無媛連公は同書千葉郡条の「山梨郷」を、それぞれ連想させる。吉田東吾^九も関連性があるとみている。

仮に山梨郷が山無媛と関連があるとする『和名抄』千葉郡条に山梨郷と並記してある「物部郷」^{二〇}も、すでに山梨郷と同じ頃、設置されていた可能性が高い。

古代における物部家はどの程度、房総半島にかかわり合っていたであろうか。

『日本古代人名辞典』^三は、「物部家」の人名五〇四名を掲載している。地域的には、北は常陸国から南は肥後国に渡っている。今、各人の居住

地域につき上位五カ国と関東地方の人数を一覧にすると表の通りとなる。物部家の勢力基盤が西国にあったことが分かる。

房総半島には特に物部家の拠ってきたる基盤があったとは思われない。

表 物部家の人々の居住国

国名	人数(A)	$\frac{A}{B} \times 100(\%)$
京：天皇居住地	112	22.2
御野・美濃	71	14.1
筑前	63	12.5
越前	19	3.8
讃岐	12	2.4
常陸	10	2.0
上野	5	1.0
武蔵	5	1.0
房総半島	上総	(2)
	下総	(1)
	安房	(1)
	房総計	4
合計(B)	504	100

一方、印旛郡に隣接する逆瑤郡^三の建郡につき、『続日本後紀』^三卷四・仁明紀、承和二年三月丙午朔辛酉条に「下総国人陸奥鎮守將軍外從五位下勲六等物部臣瑤連熊猪改^レ連賜^二宿祢^一、又改^二本居^一貫^二附左京二条^一、昔物部小事大連錫^二節天朝^一、出征^二坂東^一、凱歌歸報、藉^二此功勲^一、令^レ得^二於^二下総国^一始建^二逆瑤郡^一、仍以^レ爲^二氏^一、是則熊猪等祖也」と説明している。

ここに記されている物部小事大連なる人物は、『旧事紀』^{二四}には物部小事連公と記され、清寧朝（四九〇年頃か）^五頃の存命と推定される。物部尾輿は小事の従兄弟の子となっている。今、参考までに『旧事紀』天孫本紀の記事を基にした系図（次頁）を掲げる。

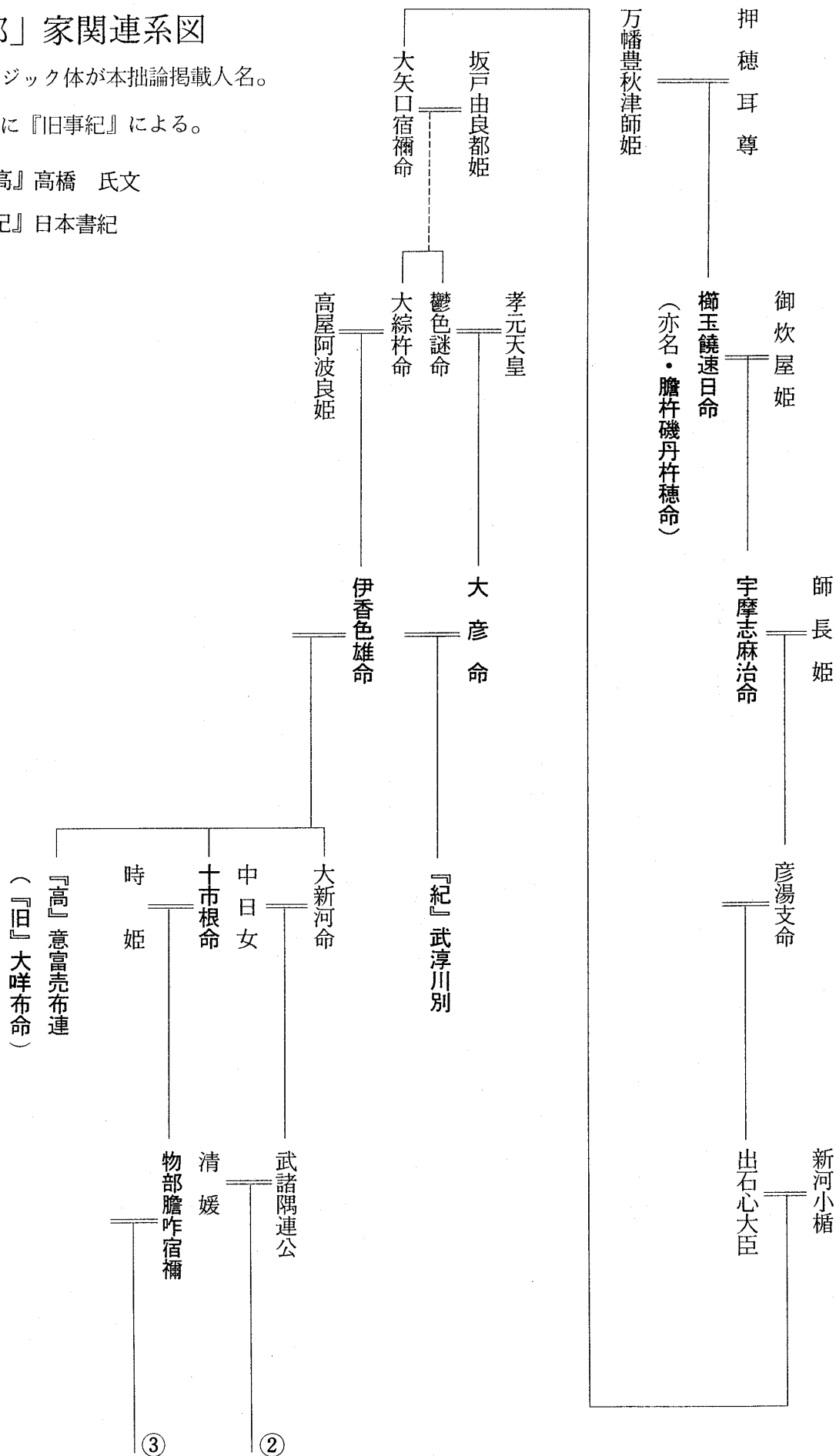
逆瑤郡は、印旛郡に隣接しており、その建郡の創始者が、物部家縁の

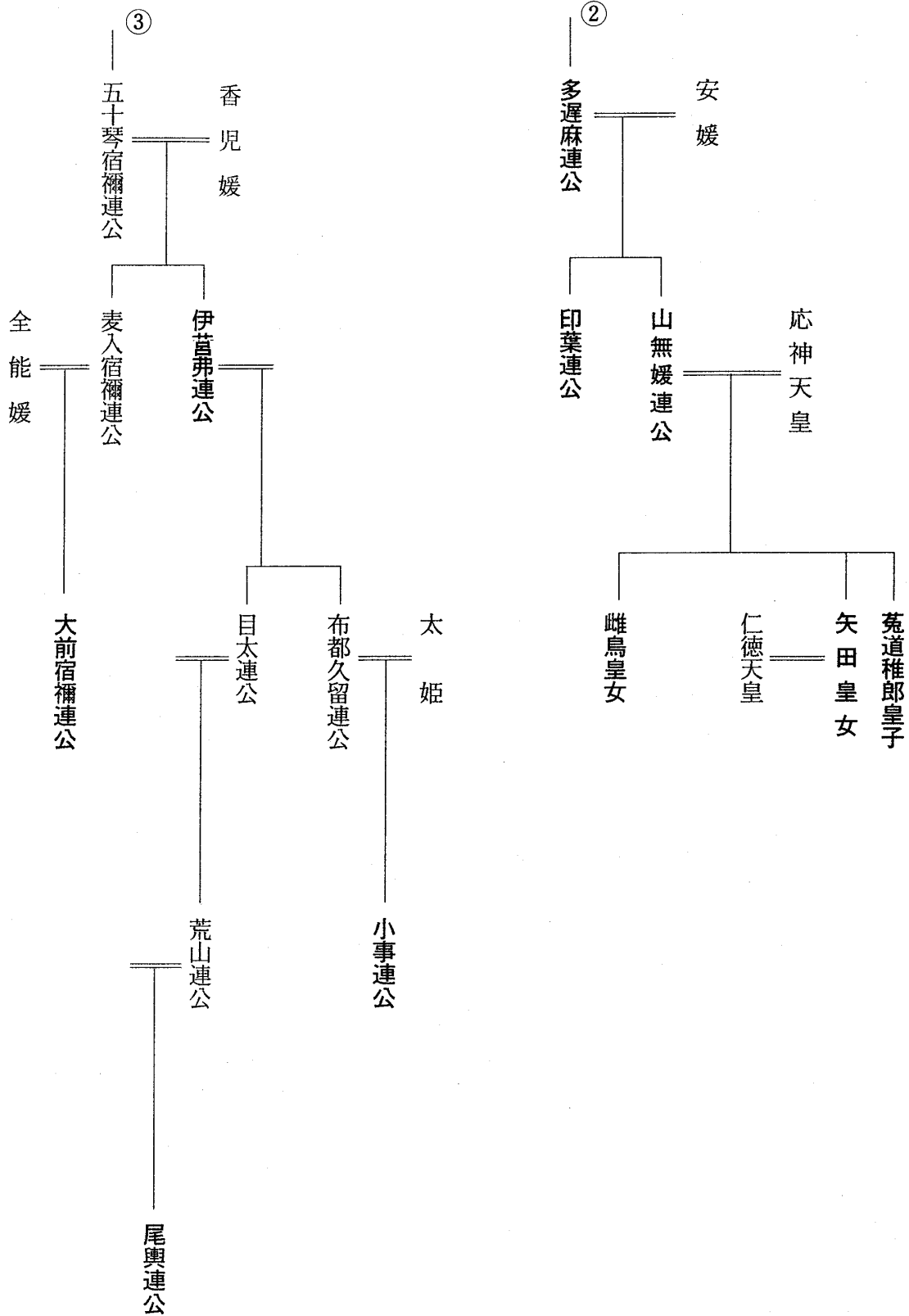
「物部」家関連系図

- ・ゴシック体が本拙論掲載人名。
- ・主に『旧事紀』による。

『高』高橋 氏文

『紀』日本書紀





者と言うのは注目される。房総半島に物部家の拠点はなくとも、ある種の縁はあったものと考えた方が自然である。

文献上、物部家と思われる人物が、房総半島と最初のかかわり合いを持ったと思われるのは、『高橋氏文』^{二六}に言う「若湯坐連等の始祖・物部意富売布連」であろう。

この物部意富売布連は『旧事紀』^{二七}に「(物部十市根大連、物部ノ武諸遇ノ連ノ公ノ女子時妓為妻生五男)弟大咩布命、若湯坐ノ連等ノ祖、(垂仁)天皇御世並為侍臣供奉」とある。「若湯坐」については『姓氏録』^{二八}撰津国神別に「若湯坐宿禰、石上朝臣同祖、神饒連日命六世孫伊香我色雄命之後也」とあり、同書河内国神別に「若湯坐連、膽杵磯丹杵穗命之後也」とあり、『日本書紀』^{二九}卷二十九・天武紀十三年十二月戊寅朔己卯条に「若湯人連、(略)五十氏賜姓曰宿禰」とあり、『和名抄』^{三〇}上総国周准郡条に「湯坐」郷がある。元の貞元村、^{三一}現在の君津市貞元・下湯江一帯と思われる。

垂仁天皇に供奉していた物部意富売布連が、景行天皇房総地域行幸伝承に登場してくるのは、或いはすでに房総半島に足跡を印していた連が、護衛役を務めると共に、道案内役を務めていたのかも知れない。

君津地域が、日本武尊と弟橘媛との伝承を伝える地域に入ることも注意する必要がある。日本武尊伝承は大和王権の房総半島進出の初期の組織的進出であることは十分考えられるからである。

物部意富売連―若湯坐伝承は、物部家の房総半島への最初の一步となった故事を伝えているのかもしれない。

少なくとも、山無媛・印葉姉弟の房総半島定着への足がかりはできて

いたことになる。

先記した『和名抄』下総国印旛郡に属する山梨が、山無媛の名代部的存在とすると、隣接地に同時代頃「物部郷」的祖型ができたことは考えられる。時代的には、応神朝であるから四二〇年頃となる。

又、印葉と印播は音通であり、「印播(旛)郡・印幡郷」が、この印葉連公からとられた可能性もある。

さらに注目されるのは、現・佐倉市大條塚・小條塚の名である。同地は現在大小に分かれているが、年代は特定できないまでも、かつて條塚と言っていたものが二つに分かれたものという。^{三四}(図四参照)

大條塚は四街道市山梨と同物井と隣接するが、この三地の三又点に塚がある。清宮秀堅も吉田東吾も特にふれていないが、條塚なる地名は、この塚にちなむものではあるまいか。

しかも、現在この塚には孟宗竹が群成している。塚のみならず、大篠塚・小篠塚には人家の庭や丘陵地に、塚に群成している竹と同種の竹が密生している。おそらく篠塚の地名は、この竹の群成と塚の組み合せによって起こったものであろう。それは、塚の主と土地との結びつきの強さをあらわしてもいよう。

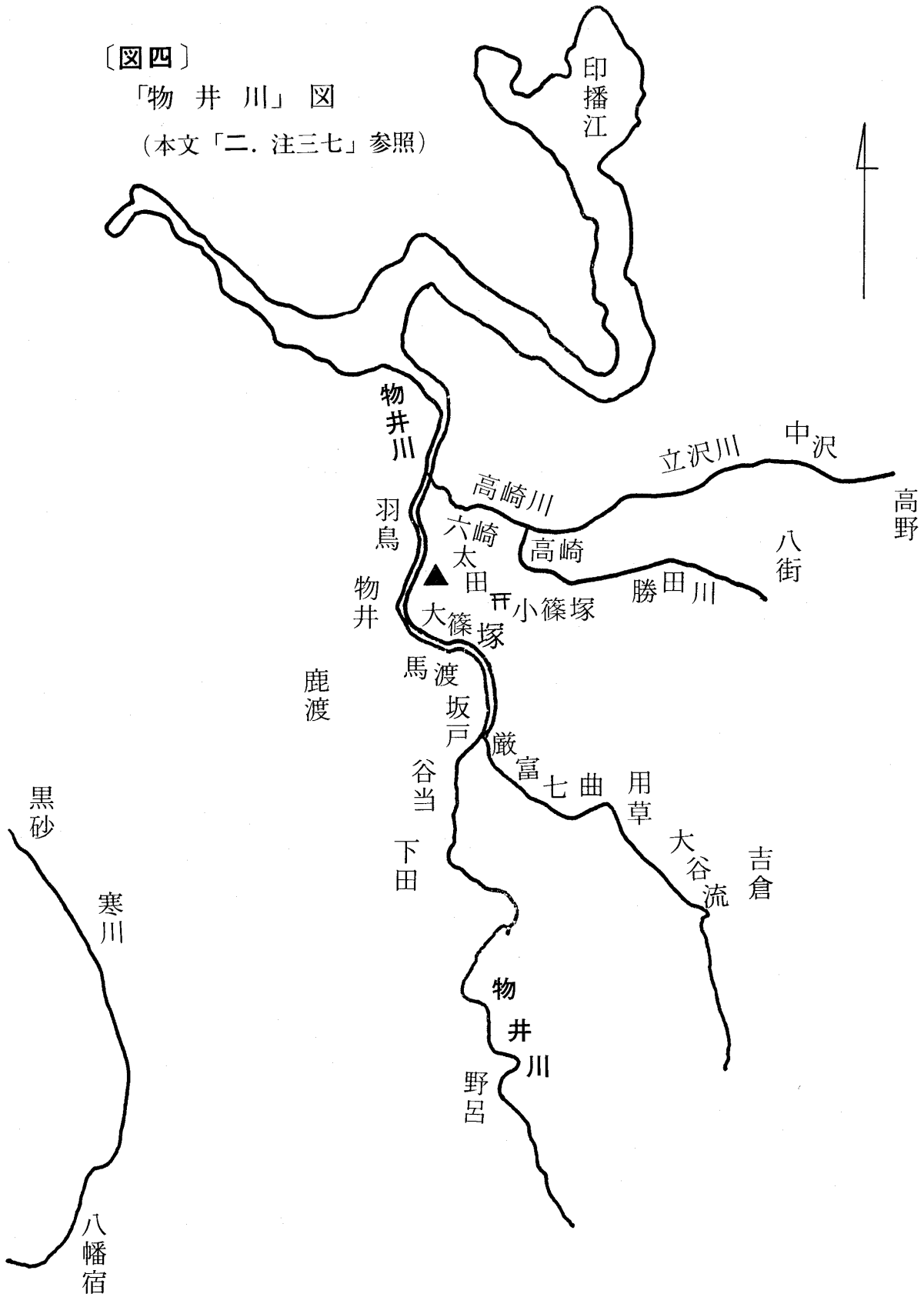
さらに、大篠塚・小篠塚の集落には、細いしかもくねくねとうねった道が人家を縫っており、その集落形成の古さが推し量れる。

又、條塚全体が南側に面したやや小高い丘陵地にあり、眼下には豊かな大水田地帯が広がっている。そして、その大水田の真ん中を鹿島川^{三五}がゆったりと流れており、上代には水稻に水を補給する恰好の水路であったと思われる。

〔図四〕

「物井川」図

(本文「二. 注三七」参照)



▲ 千葉敬愛短期大学
干麻賀多神社

さらに注目されるのは大條塚に先記した伊都許利命にちなむ麻賀多神社が建立されていることである。勧請されたものと想像されるが、近くに、物井・山梨があり、当地にかつての印播・物部に関連するものが三点も集中していることは看過すべきでない。

当該地の自然に恵まれた風土をみる時、仮に大和王権の実力者が、赴任して来れば、條塚の丘陵地に館を構えることは十分想像される。

今、その人物を求めれば物部印葉連公であろう。

塚の主は、物部印葉連公の可能性が高いことになる。ここにも、物部の祖型的成立を補強する事実がある。

ついで、「物部」から「物井」への変化及び境域の移動につき見てみる。

先記した通り『和名抄（九世紀前半成立）』には「千葉郡物部郷」とある。それが『日本地理志料による千葉県郷名分布図（明治二十年作成）』には印旛郡に属し、吉田東吾も『大日本地名辞書（明治四十四年）』の中で「物部郷、今印旛郡へ入り、千代田村即是なり、大字物井と云ふは、物部の訛言に出づ、山梨郷の西北に隣り、余戸郷（印旛郡）の西、日理郷（印旛郡）の南とす」と解説している。

吉田東吾の言う千代田村は昭和十五年十二月に千代田町となり、昭和三〇年三月に印旛郡四街道町となり、昭和五十六年四月に四街道市物井となっている（物井のみ表記）。

郡の移動は、物部郷（物井）が千葉・印旛両郡の接する位置にあった関係による。

問題は物部から物井への変化であるが、先記した通り「物部の訛音」というのが一般的である。

物部は「当ニ読ミテ毛乃乃倍ト云フベシ」とある通り「もののべ」と読むのが一般的である。しかし『地名総覧』子も「モノベ」と訓んでいるように「ものべ」と読まれた可能性もある。

今、それは措き、万葉仮名表記につき考えたい。いわゆる上代音節に従えば「母乃乃倍」ではあるまいか、大分の御指示を願いたい。

ところで、「物井は物部の訛音」説が通説であるが、「物部家の田邑」たる意味上の変化も考えられるのではあるまいか。特に物部家が滅亡していく過程をみると、「物部郷」の呼称に憚るものがあり、いつしか「物井郷」なる名称に転義していったということも考えられるからである。

以上、「物井」につきまとめてみる。

一、物井は物部の転義したものである。

二、物部から物井に変化したのは、物部家に対する憚りの可能性がある。

三、物部郷は応神朝（四二〇年頃か）にその祖型的なものが出来た可能性がある。

そして、郷里制の発足と同時に、「物部郷」はおそらく「山梨郷」などと共に成立したと思われる。

四、佐倉市大篠塚にある古墳は、物部印葉連公の墓の可能性がある。

五、篠塚なる地名は、大篠塚所在の塚と、塚に群生していた竹に由来する。それは塚の主と土地との結びつきの強さをあらわしている。

六、佐倉市物井・大篠塚・小篠塚・山梨・物井川（現・鹿島川）が互いに隣接する事実は、古墳の存在とも相俟って、物部山無媛連公・印葉連公姉弟の存在を、より際立たせる。

(注) 一、池邊彌著『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館刊行。昭和五十六年。三七八頁。

二、世界歴史事典編集部『日本史料集成』平凡社。一九九〇年新装複刊版。三八頁。

三、新訂増補・国史大系『日本後紀』吉川弘文館刊行。昭和五十七年。四七頁。

尚、大私部直善人は、大同元年(八〇六)に大椽に任命されている(同書五一頁)

四、武田祐吉校註『萬葉集』下巻。角川書店。昭和五十六年。二六九頁。

五、前掲四注・二六五頁。

六、前掲一注・三三三頁。

七、『千葉県地名変遷総覧』千葉県郷土資料刊行会。昭和四十七年。七一頁。

八、前掲一注・三七二頁。

九、前掲七注・二〇頁。

二、前掲三注・『日本書紀』及び『続日本紀』によると、例えば物部の人々は以下の通りとなる。

『日本書紀』

神武紀||櫛玉饒速日命(物部氏之遠祖)。

崇神紀||大綜麻杵命(物部氏遠祖)・伊香色雄(物部連祖)・物部八十手。

垂仁紀||物部十根大連(物部連遠祖)。二云||五十瓊敷命(物部首之始祖)

景行紀||夏花(物部君祖)。

仲哀紀||物部膳(膳)昨連。

履中紀||物部大前宿禰・物部伊莒弗大連・物部長真膳連

安康紀||物部大前宿禰。

雄略紀||物部目大連・物部菟代宿禰・物部大斧手。

武烈紀||物部鹿火大連。

継体紀||物部鹿火大連(大將軍)・物部至至連(百濟本紀云)。物部伊勢連(父根)。

安閑紀||物部鹿火大連・物部木連子大連(物部宅媛の父)・物部宅媛

(安閑天皇の妃)・物部大連尾輿。

宣化紀||物部鹿火大連。

欽明紀||物部尾輿大連・物部施德麻寄牟(百濟人か)・物部連奈率用歌

多(任那人か)・物部奈率哥非(百濟人か)・物部莫奇

(百濟人か)。

敏達紀||物部弓削守屋大連・物部鷺子連。

用明紀||物部弓削守屋大連。

崇峻紀||物部守屋大連。

孝德紀||物部朴井連稚子・物部二田造塩。

『続日本紀』(官位除目のみは人名のみとした)

元明紀||物部乱(讃岐国寒川郡人)物部毛虫咩(土佐国入)。

元正紀||石上朝臣麻呂(左大臣)。物部国依(常陸国信太郡人)。

聖武紀||物部用善(賜物部射園連)・物部韓國連広足(外従五位下典藥頭)・物部依羅朝臣人會(從五位下信濃守)・物部連族子嶋。

孝謙紀||物部王・物部山背。

淳仁紀||物部広元。

称徳紀||物部蟠淵(上野国甘楽郡人中衛。賜姓物部公)・磯部牛麻呂

(上野国甘楽郡人外大初位下。賜姓物部公)・物部淨志朝臣

(拜法參議)・物部磯浪・物部孫(弥)足・物部直広(武蔵国

人間人正六位上勳五等。賜姓入間宿禰)・物部麻呂(備前国御

野人。賜姓石生別公)・物部宿祢伊賀麻呂(近江国入。復本姓

物部)

光仁紀||物部磯波(外従五位下左兵衛大尉)・石上大朝臣宅嗣(中納言

正三位・兼中務卿)・多芸連国足(左京人正八位下。賜姓物部

多芸宿禰)・物部坂麻呂(美濃国多芸郡人。物部多芸連)・物

部得麻呂。

桓武紀||物部射園連老・石上大朝臣宅嗣(大納言贈正二位)・(物部)

麻呂(左大臣從一位)・(物部)弟麻呂(中納言從三位)・石上朝臣家

成(正五位下民部大輔)・物部多芸宿禰国足(中宮少進從五位

下因幡介・兼越中・中宮大進從五位下兼常陸大掾・圖書助)・

物部志太連大成(常陸国信太郡大領外從五位上)・物部韓國連

真成・物部建麻呂・物部海連飯主(女儒外從五位下)・韓國連

源(外從五位下。伏望蒙賜高厚許)(物部)塩見。

一一、大野七三編著『先代旧事本紀』訓註。新人物往来社。平成元年。

一二、前掲三注・『日本書紀』前篇。二七〇頁。

一三、荻原浅男他校注・訳、日本古典文学全集『古事記・上代歌謠』小学館・

刊。昭和57年。二四七頁。

- 一四、前掲二注・二二七頁。
- 一五、前掲二注・三二二頁。
- 一六、前掲二注・三二七頁。
- 一七、一八、前掲一注・三七八頁。
- 一九、吉田東吾『大日本地名辞書』五・坂東・東京富山房。昭和十四年。三三三頁・三三九一四〇頁。
- 二〇、前掲一注・三七八頁。
- 二一、編者・竹内理三他『日本古代人名辞典』第六卷。吉川弘文館。昭和五十二年。一七一五―四五頁。
- 二二、『和名抄』下総国条に「逆瑳郡」がある（前掲一注・三七九頁）。
- 二三、前掲三注・『続日本後紀』。三八頁。
- 二四、前掲一注・天孫本紀。一二三頁。
- 二五、安本美典著『神武東遷』中央公論社。昭和五十六年。一三三頁以下。
- 二六、編集兼発行者・市島謙吉「伴信友全集第三『高橋氏文考注』」国書刊行会。明治四十年。四十八頁以下。
- 一一注二六参照。
- 二七、前掲十一注・一一八頁。
- 二八、佐伯有清著『新撰姓氏録の研究』本文篇。吉川弘文館刊行。昭和四十七年。二五三・二六四頁。尚、同書考證篇一二二・二三八頁参照。
- 二九、前掲一二注後篇・三七五頁。
- 三〇、前掲一注・三七二頁。
- 三一、前掲七注・二四頁。
- 三二、エリアマップ『千葉県』昭文社。昭和五十七年。
- 三三、前掲三三注・『佐倉・四街道市』。一九八九年。
- 三四、前掲七注・九四頁。
- 三五、千葉敬愛短期大学の裏手を通る道路を挟んだ反対側にある。
- 三六、清宮秀堅頼栗著『下総國舊事考』明治三十八年。
- 三七、前掲一九注。
- 三八、鹿島川につき吉田東吾は次のように述べている（前掲一九注・三二四〇頁）

佐倉鹿島台の下に匯合する野水にして、北に赴き、印旛湖へ入る。其間一里許の流江を、川口とも称す。

鹿島川は二支源に出づ、一は内野、高野に発する立沢川にして、西流し来り、柳沢牧の勝田川、高崎川を合せて、六崎、鎗木の間を経て、

鹿島台の下に至る。一は千葉郡に属する千葉野に発源して北流、岩富、馬渡を過ぎ、物井川の名あり。二流匯合の辺、地勢卑濕、以て佐倉西南の阻障を成す。

前段の立沢川―鹿島川は現在の高崎川（前掲三三）であり、JR物井駅の東を北流している鹿島川に下流で合流する川である。

條塚から物井駅の東を北流する川は、はっきり物井川と称されていたもので、磯邊昌言は次のように述べている。『佐倉風土記』享保七年。

「『房総文庫』房総文庫刊行会。昭和五年」二四頁所収）。

在「印旛郡」ニ、二源皆出「上總」国ニ、一ハ自「野呂」来リ歴「下田・谷当」ヲ北流十余里ニ至「坂戸」ニ、一ハ自「吉倉」来リ、歴「大谷流・用草・七曲・嚴当」ヲ、西ニ流ル十余里ニ至「坂戸」ニ、二水相会シ、入「馬ノ渡」ノ橋下ニ又西北ニ流ル六里ニ至、為「物井川」ト、出「于小名木」ニ細流過「鹿渡」ニ、亦会「于此」ニ、而北ニ流ル三里ニ至「羽鳥」ニ、又与「高崎川」会シ、遂ニ北流シ於城西ニ、過「鹿島橋」ヲ六七里ニ至、而入「印旛江」ニ焉。

やはり、物部郷（物井）の与える影響は川の名にも現れていたとみるべきであろう。

三九、前掲一注。

四〇、柳岡良弼著『日本地理志料による・千葉県郷名分布図』千葉県中央図書館蔵。明治二十年作成。

四一、前掲一九注・三二四〇頁。

四二、四三・四四、前掲七注・九四頁。

四五、田邑。「井」には「一里四方の田地・むらゝ人の聚り住む所」などの意味がある。すなわち「物井」は「物部家の田邑」の意となる（諸橋轍次著『大漢和辞典』巻一。大修館。昭和三十五年。五一九頁）。